

和田節  
編定

開明  
小説

春雨文庫

第三號

下

20

25

30

35

A 440  
1

春雨文庫第三編卷之下

東京

松村春輔 閱  
和田定節 著

第十回

お岩いわの清兵衛せいべいの顔かほを覗のぞきこと貴君あきみりうりう一ッひとお上あが  
 んんるるさいさいませませんんうう一ひと左様さやうささ次つぎで貫ぬきををううるるアア何なんどどり  
 長文ながぶん句くの手紙てがみでで以上いじょうかかとと付つ込こめめへへ一ひと商賣しょうばいちちががひひるると  
 ととああちちキキアア外あれれどど清きよ水みづのの具ぐ照あささままももおお経きやうをを讀よみみてておお在ありり

010190508256

48-7538

るされを何のこころのふ攘夷どと鎖港どと  
うで氣を揉ととろく海の中へ身を投てお死去  
るされととのこころ「まアお氣の毒さまる誤平  
野さんも黒田さんへお名捕成とのごとと  
まア「何ふしろ讀で仕まをうア「然れども旧  
藩の事もある朋友の中ふ同志の者の無よあつねが  
竊ふ此書と認むるを得されを君よ呈して今日  
の失策を告ぐ僕は是より福岡へ引れ函閉さるるに相

春雨三下一

違ふ一尤も此度の同志薩藩有馬新七以下への既  
ふ一封を贈りたれを僕が今日の危難の知りぬべし  
因りて西郷君山田君などの人々よ面會あらん日僕  
が成行を宜しく諸君よ話し下されと云々と有  
りけれを清兵衛のいよく以て黙然とりしが暫時あ  
つて苦笑ひるし「諸藩の人達がおよびもせぬと  
ふ氣を揉と攘夷どの鎖港どのと騒いどつて何様  
なるりのり嗚呼とあはれ美味雑炊を固まら

して仕まつとア

島津泉州の東武ふ至らんとして播州姫路へ着あ

りし平野次郎巨魁となり有馬新七以下二百

餘人の浪士と率ひ其旅館へ推参して言ふ我輩ら

錦旗の魁して大坂二條彦根の三城を同時みせり

取り令と七道の諸藩み下し皇駕と東國みき

しらせ幕府を追ひ攘夷の功と速に遂んと欲

す臣ら微意を憫れと此事を以て君侯より至

春雨三下二

急上奏し給をんと願ふとるりけれを泉州不

の渠らぐ暴挙の止む可からざるを察し浪士一同

と相俱し伏見まで至りしうバ京師の騒動大か

ならず時不泉州の浪士らと伏見止めなき上京

ありて天下の景勢と演説ありしのち浪士の支と

上申し平野二郎より差出したるころの書一通を

呈し御指令の程を待ち居り然るは薩州の脱士

有馬新七橋口壯助同傳蔵田中謙助弟子九龍助柴

山愛次郎森山新五左工門ちまあへんらうのりまゝしんごら名泉州の所置因循せんしゅうしよちのんごんる  
りとして伏見を發足し京師に迫らんとなしける故おま  
泉州驚き隨従より来りし臣下のうち奈良原喜せんしゅうをきぞうぞうどう  
八郎大山綱良らと伏見へ遣りこれを止めて諭せおみやまつらう  
ども聴ず遂に争論を發し闘ひを交るゝ至り有きさく  
馬新七以下の奈良原大山とりの為に尽く討ちまにんしちいり  
され先その事の事ハ濟とるるありまが  
此ころ京師ふの時より神社の札の天より降り下るけいし

春雨三下三

とつゝと始まり何屋の家へ出雲の大社のお札がふなつか  
り誰さんの家へも出雲の大社のお札が降とく何たれ  
屋の息子と誰さんの娘とい夫婦なるは違ひないや  
縁結びの神さうなのお札が両方へ降とのごりのヲとえんむす  
一人が言へば一人が又言ふ先計町の伊勢屋の家へ大ひとり  
神宮さうなのお札が降とく息子の錢づらひの尻がこかみ  
れお拂ひ相成ておまひ祇園町の魚屋の見世の先おら  
へ西の宮の惠比須さまのお札が降とく其処の家のあ

親翁おやぢの大きう釣つりが好すきよ成なるとりひてまゝ中白山なかつらやまの  
 俵屋わたなべと言いふ本屋ほんやへの辨べん天てんさぬのお札ふだが降おりてから亭てい  
 主しゅの藝げい子こが好すきよあり祇園町ぎんまちで生うまはれ辨べん天てんさぬと  
 評判へいばんとされ小常こつねと言いふ藝げい子こおをまり込こんで仕舞しまり  
 ととりひ話わしき「オやく」左様さやうしてゐると江戸えどの城しろへの  
 外國ぐわいこくの天帝てんていのお札ふだでも降おりて關東かんとうの役人やくにんの外國ぐわいこく  
 人ひとおをめられて仕舞しまりとのりも知しれんころいみア  
 諸神社しよじんしゃの神符かみかぎ降おりて此後このち慶應三年けいおうさんねんの秋あきお至いた  
 春雨はるあめ三下さんげ四し

京師けいし近傍きんぱう摂州せつしゅうへん及び東海道とうかいどうすぢみまで廣ひろか  
 り一般いぱん又また是これと言いひイヤセり思おもふよ又また文久ぶんきうの末すえより  
 此事このことちとゞ有ありしころ  
 俵屋わたなべといふ本屋ほんやの勤王家きんこうけで薩州さつしゅうや長州ちやうしゅうや其外そのほかの諸  
 浪人らうにんが出で這りして關東かんとうと押し潰つぶし外國人ぐわいこくにんと追おひら  
 ん目算めざんとして居ゐる人ひとどといふぢやア移人うつしにん「其様そのようなこ  
 とア何なんぞり知しり移人うつしにんが劍術けんじゆつが出来でき本ほんも讀よんでゐる者もの  
 と言いふ話わしの邊まはりて居ゐる「何なんでも所司代しよしじだいや町奉行まちづかひ

清兵衛せいべゑ妹い阿あらら

辻占ついでんの  
飛とびひひ

春はるは  
ささか



清兵衛妻せいべゑつま  
於お岩いわ

春雨春雨三下五

でも附つて居ゐると見え目明めあ共どもが陰かげまり陽ひまり  
探索たんさくとする様子ようすと「自己おのれの朋友ともの終屋しゆうげとりのが俵屋はつらね  
の末社すえで始はまり出で這はりて居ゐるかその男おとこの話はなしが  
やア勤王きんおうとてころろ小常こつねとて入り込こみ先計町せんけいの藤村ふじむらと  
りみ家うちへ入り居ゐるさうと道みち往ゆく人の高たか声こゑが  
耳みみに這はり入れを清兵衛せいべゑの女房おんなむらと岩いわと清兵衛せいべゑの妹いと樂ら  
顔かほと見え合あひ目めで知らせ後あと小附こつきで往ゆる程ほどと二人ふたり  
傍わらわの家いへへ入り居ゐるさうと茲こゝに於おか岩いわと樂らの互あひ

みあつくと溜息つき「姉さん、今の話」とおっしゃるす  
つとく岩、波まゝとが僅り五丁り七丁の道と歩行ま  
みも彼様る噂の波へる、真よ苦勞でございます、後  
つねん又兄さんと者と事、徳坊や庄坊のあるうへ  
慈母さんや私まで姉さんお一人お押附ておき並の  
人の固る時分又祇園町の小常とやらお欺ざれ先計  
町の藤村とつゝ家へ通ひ無多るお金を遣ふのころ  
姉さんの様る善いお人お苦勞とお為せ申すので慈

長雨三下六

母さんお實にお氣の毒どと言て居ります、まこと  
小常とやらが悪くつて憎くつて扱つてやりとら、お計  
います、一寸買りのよ出てき人今の様る話と噂のど  
から  
お樂い清兵衛の妹今年二十よして眉目かちち美  
まのそゝららず糸竹の道お蘭け心ざまお優く母ま  
と兄お仕へて孝なれお兄、お姉お中心やうなりお樂  
身の上お亦一奇談あり、お開い追々お説き出すと



ついで知りくぬへり

お岩いわの四邊あがり見まへりて声こゑを竊ひそめ「イエお樂らくさん左様さやう

でいふい小常こつね小現こげんを扱ありとのい世間せけんをつむ表あらわお

き先刻さつきも平野ひらのさんくう来きとお手紙てがみと函はこ読よるさきり

口の先さきでい困まつと馬鹿ばかる人とちどるぞと悪わるく言いてい

お在いどけとと私わたしの桂かきさぬや村田むらたさぬの西にし容よう子こと

言いひ何様どうも勤王きんおうとやらのお仲間なかつまで今いまの人の話はなしして

言いととつり所司しよし代様しろやお町奉行まちぶぎやうで人ひととまへりは穿く

春雨こはる三下さんげ七

議ぎとるさるのが実正じつしやうでいふいと思おもえれ苦勞くらうでく

監かんえ出ですと夜よも平ひらふの眠ねられませんそれ夫それも先刻さつきも嶋しま

津和泉つわいづさまとつりふ方かた浪人なみのり者と連つれて京きやう都とへお

込こむとの話はなしととまき二日ふたひ酔よで氣きえとくハ何なん分ぶん能のうい

ク鶏卵けいらんの雑炊ざつひで勢いきひが附つとから世間せけんの模も様やうをつんで

来きやう兎角とくかく商人しやうじんの損徳そんとくハウうと時ときおあるとつ言いて其その

処こゝへ不出でておいで有あつと去き年ねんあつりわつりの容よう子す

ハ何様どうも只事ただごとでい無なうと思おもいれまそれす夫それとつり人ひとを小こ

常つねの事こととい言いても私わたしの何ど様ようも然さうとい思おもへれるのワ併いっしょ一いつ慈あつ母ははさんよ此この様ようといふはせしては去年こぞ寄まりしたをおもいだして居いるの極ごくの内証では座ざおもいだして居いるの悪わるいからは慈あつ母ははさんの極ごくの内証では座ざおもいだして居いるの左ひだり様ようおもいだして居いるの私わたしも実に怪しく疑うつつといふのではどいちも何なん程ほど小こ常つねが孤でも人は異見とい言いふの年としおもいだして居いるの化まさとうと開ひらいては藝げい子こさんといふの何時いつでも苦い顔といて心は苦勞の有りといふの

春四三下八

げらる容子ようしおもいだして居いるの姉あねさんの死し体たいといふのりりも知れませんが若左わさ様ようどのといふの大おほ變へんぢやアは坐まいませんといふの二ふた人にんが真の話も知らず向むかう来きて大勢せいが可なりといふ軍ぐんどく彼かれ様ようの年増とせといふの戦いくさひてへるアといふの

第十一回

八

箱根なまねニア八里の馬うまでも越こすがト戯けあそ場ばふとのせし權けん八  
の出で端はみろ鈴すずが森もりみれども夫それよりそれずらと神奈川かながわの  
方かたへよりうみうる海うみの端はよせ来くるる波なみの岸きし辺べるの松まつ吹ふく風かぜ  
と音ね凄せく月つきの有ありても三日さんじつ四日よっぴつの足あし一ひとき光ひかりり山やまの  
端はへ入いり相過あひすぎ一火燈ひしほ一ひとごろ往来やうらいの絶とぎて寂漠せきむくなる生麥なまむぎ  
の松原まつはらと神奈川かながわの方かたより十七じゅうしち八はちと思おもひし娘むすめの息いきと切き  
らう足元あしもとえどろふ駈かけて来くるる後あとより踏ふの音ね高たかく外ぐわい國こく  
人ひとが追おひおけ来きり八町やちやう繩手なづなの中なかつごろで娘むすめ不追おひおつき

春雨三下九

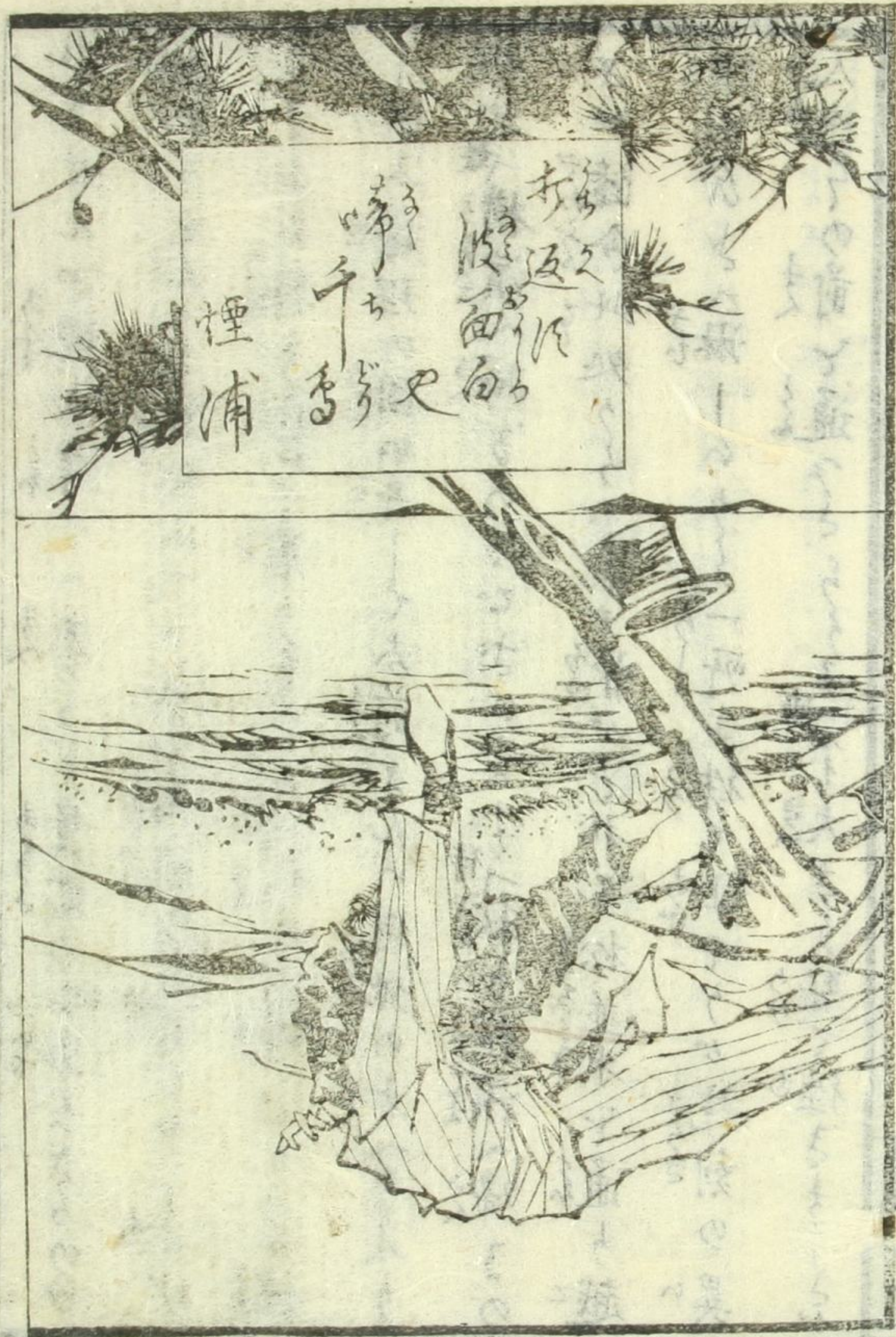
後うしろ方かたより帯おびの結むすひめと引ひきとく人ひと一ひと貴あま嬢なづな助すけへ茶ちやありま  
すうと言いふのを認こり餘よの言葉ことばハとハア海うみとチンカン娘むすめ  
ハ鷹とら不つ極まれ雀すずめの如ごとく身みと縮ちぢめアエと斗たたり戦いくさ  
慄おそふ人ひとそのまゝ其その処ところふ立たちすくむ脊中せみちゆうの方かたより手てと  
まへ外ぐわい玉人たまひの娘むすめと抱かかき猶なほもつらう口元くちもとふ涎よだれをたら  
し目尻めじりと下さげ恍ふやう惚ぼつとせし顔かほつきの口説くちどいて直ま不ふ横濱よこはま  
の我われが館内くわんないへ連つれゆるん心こころありとぞ知しられける然され  
ど娘むすめの逃にげんとして彼かれが思おもふふ任まかせねば怒いらりの餘あまり手て

短うふ本意を遂ん心よありーくいあふ言ひる  
ぐ娘のきを取ら傍る松の木蔭へ引きずつて往  
んとするを性すと争ふをありう女力何様せん  
方もなく不くり折る此処へ来る人ハ年まど若き  
侍の袴羽織ハ大小を差せしと見るさ人灰暗きよ立  
止りて窺ふハ此方の模様と見るあらん娘ハ早く声  
と掛け「其処へお出のい何方様う存しませんが外国人ハ  
捕まんで難儀とするのハ助けるすつて下さいまーモシ

お願ひでございませうと云れて點頭武士ハ二人の側へツカ  
より「何と妹ぢやア初入り何様と云ひ」外国人ハ武  
士ハ向ひ頭を左右へ振り「貴君へく彼の武士ハ何ふ  
言はず外国人の利腕をとつて娘を突きまはし二人が中  
へ割り入りながら娘ハ向ひ「お前ハ早く逃て仕まひな  
娘」夫でも貴君とハ宜かろト急き立られ娘ハ元来一  
道のかく人暗きよ紛れ逃往きつて外必人の是を見く  
ハアハアと怒り不堪ぬ声りろとも不足を揚げ彼の武

士と蹴け久くせをさむらひ武士をやく身みをかたし暗くらきまらぐらも  
術う有あるく彼方かた此方こなたへ除よけりしが異入いじんのますくま猛まりり  
止や法まをめん面めん倒たうると言いなぐら苛いらつてけ蹴けつけるあ外あ必べ人にん  
の踵かかとをあ右手みぎてであ確たつりと取とりちカままらせて反ありせバあ外あ国こく人にん  
へ仰あむけまけけと飛とびた倒たれてはハらフら侍さむらいのあ猶なほ驚おどりと吳くれ  
んとく刀やふそ反ありち後ありけれを白あ刃やのあ光ひりあまますく  
仰あ天あ起ありまずあ這あひずりあるあぐら周あ章あふあめあきあ逃あげ  
往あまらずあ若あ侍あのあ口あのあうあちあ一あ稍あもあすあるあとあ外あ必あのあ奴あらあぐ

若い女おんなとつまままんて悪わるいことと仕し様やうとするおやア困こまりき  
るあ成なるあ程ほど蹴けるあのあなあらあなあカあどあがあ身あ體あああ合あせあるあとあ思あ  
ひあのあ外あはあ弱あいありあのあどあとあ私あ語あるあぐあらあぐあらあとあ此あ侍あもあ神あ  
奈あ川あのあ方あへあむあひあてあ三あ四あ丁あ来あるあはあ傍あのあ出あ茶あ屋あのあ蔭あよ  
りあ只あ今あはあ難あ有あるあこあのあまあしあとあなあ蔭あさあらあなあであとあ言あひあまあか  
らあ腰あとあ屈あちあてあ立あ出あるあのあ前あへあ逃あせあ娘あをあれあはあ武あ士あへあ振あ  
りあ向あきあつあてあ用あやあこのあ淋あいあのあおあ前あへあまあどあ此あ様あなあとあこあろ  
おあおあ在あのあうあ一あ淋あくあつあてあ怖あくあつあてあ齒あのあ根あもあろあくあああ合あ



春雨 三下十二

ひませんが餘り遠くへ参ると貴君のお出るさうのが  
知れませんが此処ふつぐろを先程のお礼とやり上げ  
とさよお待まりして居りますと何のお禮どころか彼  
しき不儀理の固い丹してお前さんの何地の方へ入り  
のど横濱へ帰るのでございませす私も横濱へ帰るの  
どが随分此処くちぢやア骨がとれる松並木を通り越  
すあひどへ淋しいくく一所へ往て上やうが先刻の異  
人への前と通つたらう子大さう駈て往きまうとが

亦捕まるるウ怖りまうと何様の誤と知らねが  
待ぶせよして居る程の事もあらう何れも誤のあるの  
ぢやアございませせん何れも早く往う私の後へ附て  
かいでまう直其処が子安村とが先頃ッから見ると大そ  
う暗く成と思つたら雲が出て来ると今朝の地震と  
言ひ何様やら雨も降りさうと仰向く顔へびらちりト  
當るよ敬馬うきアヤア空然噂も出来ねへまう降て  
来と娘の妻さなでございませす私へ何のお前さん

が降せやアおめ人ー娘それ  
夫下も吾侪とお助け下さるので  
手取れ雨お逢なさるのでございませう侍  
前さんの事お関係お人々うと  
言て何様して降り  
出さねへうちに横濱まで帰れるのり何よーてもまう  
四五丁往やア心易い家が有るう  
沢山遣つて来ぬ  
うちよ其処まで急ぎやせう  
娘それ  
夫下の一所どと思われ  
るいやよ離れてお後々参ります  
何卒お願ひ  
やいま侍この暗さ下の男ウ女ウ分らぬ人々  
双んぞ

歩行ても宜い遠慮おア及びやせん  
お礼がやー上と  
さお侍中してとり却つて亦お世話さなま  
有難有  
うございませう侍  
何の脊負でも仕やアおめ人ー  
自分こッ  
こみ徒歩て往くのどりのヲ世話  
どころの話おや後  
へ只厄介なの此雨どるう  
遣らして来とト言ふるお  
らぬよ又トツと下降り強く来る故  
らやア終終お人併直其處  
ど私の後う急いでおいでト言ひ  
袴と摘上げ駈れ娘  
も足と早め往くる程る  
茅葺の家の檐端へ  
と這入



後見<sup>あ</sup>久<sup>く</sup>りて<sup>さ</sup>武士<sup>し</sup>の<sup>ま</sup>前<sup>まへ</sup>さん<sup>も</sup>も<sup>ま</sup>の<sup>う</sup>家<sup>け</sup>で<sup>し</sup>私<sup>わが</sup>と<sup>し</sup>一<sup>い</sup>所<sup>しょ</sup>は<sup>あ</sup>雨<sup>あめ</sup>  
と<sup>や</sup>罷<sup>ま</sup>せ<sup>る</sup>る<sup>そ</sup>夫<sup>む</sup>で<sup>を</sup>そ<sup>り</sup>や<sup>ア</sup>降<sup>ふ</sup>ら<sup>れ</sup>る<sup>し</sup>支<sup>し</sup>度<sup>ど</sup>で<sup>お</sup>出<sup>い</sup>る<sup>せ</sup>ん<sup>ト</sup>  
声<sup>こゝ</sup>か<sup>け</sup>み<sup>ぐ</sup>ら<sup>う</sup>入<sup>い</sup>り<sup>口</sup>の<sup>あ</sup>雨<sup>あま</sup>戸<sup>と</sup>を<sup>か</sup>瓦<sup>がら</sup>落<sup>ら</sup>裡<sup>り</sup>ひ<sup>き</sup>明<sup>あ</sup>け<sup>て</sup>一<sup>い</sup>老<sup>らう</sup>母<sup>ぼ</sup>  
ア<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>は<sup>お</sup>居<sup>ま</sup>る<sup>う</sup>生<sup>なま</sup>麥<sup>むぎ</sup>の<sup>ま</sup>松<sup>まつ</sup>原<sup>はら</sup>と<sup>お</sup>外<sup>と</sup>れ<sup>る</sup>と<sup>お</sup>降<sup>ふ</sup>て<sup>来</sup>と<sup>の</sup>で  
此<sup>こ</sup>様<sup>さま</sup>濡<sup>ぬ</sup>て<sup>仕</sup>ま<sup>す</sup>と<sup>ア</sup>と<sup>い</sup>言<sup>い</sup>ふ<sup>声</sup>泣<sup>な</sup>き<sup>つ</sup>け<sup>奥</sup>の<sup>か</sup>方<sup>かた</sup>より  
六<sup>む</sup>十<sup>じ</sup>む<sup>ら</sup>う<sup>の</sup>女<sup>むすめ</sup>が<sup>立</sup>出<sup>だ</sup>で<sup>ア</sup>オ<sup>オ</sup>オ<sup>オ</sup>若<sup>わ</sup>且<sup>じ</sup>那<sup>な</sup>江<sup>え</sup>戸<sup>ど</sup>の<sup>お</sup>家<sup>け</sup>へ<sup>い</sup>ら<sup>う</sup>  
者<sup>もの</sup>や<sup>つ</sup>と<sup>お</sup>帰<sup>か</sup>り<sup>が</sup>け<sup>で</sup>は<sup>お</sup>坐<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>す<sup>の</sup>う<sup>エ</sup>开<sup>ひ</sup>て<sup>お</sup>連<sup>れ</sup>さ<sup>る</sup>  
が<sup>あ</sup>る<sup>で</sup>い<sup>は</sup>な<sup>い</sup>ま<sup>せ</sup>ん<sup>う</sup>一<sup>い</sup>左<sup>さ</sup>様<sup>さま</sup>サ<sup>生</sup>麥<sup>むぎ</sup>の<sup>ま</sup>松<sup>まつ</sup>原<sup>はら</sup>で<sup>お</sup>妙<sup>たえ</sup>なる<sup>み</sup>

か<sup>ら</sup>一<sup>い</sup>所<sup>しょ</sup>は<sup>あ</sup>成<sup>な</sup>の<sup>ど</sup>が<sup>お</sup>生<sup>な</sup>ア<sup>上</sup>つ<sup>て</sup>か<sup>ら</sup>緩<sup>ゆる</sup>り<sup>話</sup>う<sup>ト</sup>後<sup>あと</sup>より  
久<sup>く</sup>り<sup>と</sup>ア<sup>お</sup>前<sup>まへ</sup>さん<sup>此</sup>手<sup>て</sup>拭<sup>ぬ</sup>で<sup>足</sup>を<sup>あ</sup>い<sup>て</sup>此<sup>こ</sup>方<sup>かた</sup>へ<sup>お</sup>上<sup>あ</sup>ん<sup>る</sup>  
せ<sup>へ</sup>究<sup>きう</sup>屈<sup>くつ</sup>る<sup>者</sup>の<sup>お</sup>居<sup>ま</sup>る<sup>う</sup>家<sup>け</sup>と<sup>ア</sup>一<sup>い</sup>ホ<sup>ニ</sup>貴<sup>き</sup>嬢<sup>ぢやう</sup>汚<sup>よご</sup>穢<sup>せ</sup>と<sup>こ</sup>ろ<sup>で</sup>は  
坐<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>す<sup>ア</sup>お<sup>上</sup>ん<sup>る</sup>す<sup>つ</sup>て<sup>下</sup>さ<sup>い</sup>し<sup>一</sup>ナ<sup>ハ</sup>イ<sup>難</sup>有<sup>あ</sup>う<sup>ご</sup>さ<sup>い</sup>外<sup>が</sup>  
是<sup>こ</sup>れ<sup>より</sup>武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>の<sup>う</sup>上<sup>かみ</sup>へ<sup>あ</sup>が<sup>り</sup>次<sup>つぎ</sup>の<sup>お</sup>石<sup>いし</sup>の<sup>お</sup>囲<sup>い</sup>爐<sup>ろ</sup>裡<sup>り</sup>の<sup>お</sup>側<sup>わき</sup>へ<sup>お</sup>往<sup>ま</sup>り<sup>て</sup>居<sup>ま</sup>  
り<sup>娘</sup>の<sup>お</sup>囲<sup>い</sup>爐<sup>ろ</sup>裡<sup>り</sup>は<sup>あ</sup>と<sup>ら</sup>せ<sup>る</sup>が<sup>ら</sup>生<sup>なま</sup>麥<sup>むぎ</sup>の<sup>お</sup>一<sup>い</sup>伍<sup>ご</sup>一<sup>い</sup>竹<sup>たけ</sup>を<sup>お</sup>老<sup>らう</sup>  
婆<sup>ば</sup>の<sup>お</sup>話<sup>わ</sup>す<sup>ら</sup>う<sup>ち</sup>老<sup>らう</sup>婆<sup>ば</sup>の<sup>お</sup>茶<sup>ちや</sup>を<sup>お</sup>入<sup>い</sup>れ<sup>餅</sup>と<sup>お</sup>焼<sup>やく</sup>て<sup>お</sup>出<sup>い</sup>す<sup>の</sup>  
二<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>末<sup>まつ</sup>の<sup>お</sup>餘<sup>あま</sup>寒<sup>さむ</sup>の<sup>お</sup>こ<sup>ろ</sup>あり<sup>娘</sup>の<sup>お</sup>始<sup>はじめ</sup>終<sup>しま</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>お</sup>毒<sup>どく</sup>母<sup>ぼ</sup>さ<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>燈<sup>あかり</sup>

ぐうさ方へ顔を向けをハハと尻込として口さう人をまき  
と利得ぬものと知りとまへ

老婆が外人の女ふかると耻も外せも思はず夢中よる  
ので折今の様る間違ひが突るのでは危いますヨ侍  
らりやア往ねへ追々雨どれの音が強く成て来と老を一降  
り出ーが悪い何瀬今夜の動けませを言ひなぐり  
娘よ對ひお家でお案するさのませうか加馬籠とヤ  
ても此処らふるーお送りやす人と侍んでの上ませ

うが今から濱迄の實ふ大変汚穢くつても宜しけれ泊  
つて夜が明とあり直ふか帰んるさのま子若旦那その  
方が好でい内坐いませんう左様さこの雨ぢやア実ふ  
仕方が移くうのウまとも泊つては悪い何どう娘  
吾侪の家江戸で吉田町の松下亭と申す料理屋が縁  
家ゆゑ手傳るう泊りよ参つて居るのでは危いまはが  
江戸の母う浦島の観音様の札を戴き贈てよとせと言て  
来まうう今日お札を戴きよ参り外折々松下亭へ来ての

悪ふきけと為る異人小逢ひ否や  
 らず小江戸の屋へ逃へ隠れやうと志まし  
 れまゝこので座いましが松下亭で直又江戸へ参  
 つゝ事と思つて居りませうくら案どの致しますま  
 が西元介と掛まつてい老む何のサ西元介事有りま  
 せんお泊るるすつても宜と極々私の方ふも此願  
 ひがおります。モ且那エ彼遠くでカシク鐘の音の致  
 ます村の婆アさん達が寄ての百万遍爺ハ川崎まる

春雨三下十七



濡る衣のなほ  
 色香あり  
 のをば梅  
 標塘

往ゆまりとのどろろ程ほどるる帰かえつて来きませうが其間そのあひだは二  
人にで留とど守もとして居ゐて戴おきかい坐まさかの方ほうへ床とこの  
敷して往ゆまする侍さむらい道みち具ぐどとせへ仕して往ゆて呉くれりやア  
何なに処ところへも往ゆがら婆ば避ま迄までのお客きやくどとささうの往ゆき  
ませんけれどまアは免めんるさいと奥おくの坐まさか人ひと寐ね床とこと  
の留とど守もと二人ふたりは侍さむらい提て灯とう下さげて出いで往ゆへ通とり  
遠ちがひの粹すいるらんう後あと見み送おくつて侍さむらいが田い舎なの波な女にアさんと  
云いふ者ものの詰つまり移うつりと身みと入いるよ此このまア雨あめの降ふりて居ゐ

春雨三下十八

るのよよ弁べんしてどんと寒さむくるるる最も少すくその焚こ火ひ付けと燃もて  
衣き類るいを乾ぬしやせうと枯く葉はをと取とりて火ひ又また入いるれば発火は燃も立た  
焰あつたの光ひかりりで思おもはず娘と侍さむらいの面おもてをと合あせておお梅うめさん  
ちやア移うつりてゐるは貴君きみのア吉きち太た郎らうさん侍さむらい何なん様ようもとは  
と振るこ声こゑぞと思おもつて折をりて表おもてを往く人が唄ひるがら  
お通とおとる都々と一いつ  
花はなの夕アと降ふる春雨はるさめ濡ぬれて見みる気もあり易い  
娘むすめを助け侍の渡辺わた吉きち太た郎らうといふ者もあり美男みおとこのおえ

有るのそゝろしず歳二十一るれども剣法は精しきとめ  
お 有るのそゝろしず歳二十一るれども剣法は精しきとめ  
つみ 神奈川の定番役とあり横濱不在勤す娘の中村源玄  
あ 清と呼ぶ人の子にて歳十八容貞の美しきのをそゝろしず  
あ 心ざらぬも優は勝れ吉太郎といふ幼稚よりの手習朋輩  
あ あり又農家の老婆は吉太郎の家へ久しく下婢と勤  
あ りし者吉太郎と名梅が中は如何なる話の出来りや  
あ 第四編は説くころと見あらしんと其ふ  
あ

春雨文庫三編下の巻終

春雨三下十九

明治十一年二月十一日御届

著者

東京府士族

和田定節

第五大区八小區  
浅草北田原町三丁目六番地

出版人

東京府平民

武田傳右衛門

第一大區八小區  
彌左衛門町四番地

明治十一年四月三日取收

